葛西賢太著

『断酒が作り出す共同性』

——アルコール依存からの回復を信じる人々——』

世界思想社 二〇〇七年五月二〇日刊

四六判 xv+二一六+v頁 二〇〇〇円+税

高橋 原

本書は、著者の葛西賢太氏の課程博士論文「心的空間における宗教性——Alcoholics Anonymousの研究」(一九九八年度に東京大学大学院人文社会系研究科より学位授与)がもとになったものである。しかし、学位論文然としていないところが本書の第一の特徴であろう。ソフトカバーを採用した装丁や、「アルコールの問題で悩んでいる方のために」として、研究対象であるAA (Alcoholics Anonymous)と断酒会の連絡先を掲載しているところなどにも、本書が、学界の枠にとらわれず、アルコール依存の問題を身近に感じている一般の読者にも向けられていることが現れている。内容的にも、分析的視点よりも、AAとはいかなる団体であるのか、メンバーがどのように飲酒の問題に取り組んでいるのかという全体像を描くことに主眼があるという印象を受ける。文体も、たとえば新聞の連載にも十分にたえるくらい読みやすいものとなっている。

各章の構成は次のとおりである。

まえがき

第1章 アルコール依存症とその治療

1 あるサラリーマンの気づき

2 アルコール依存症についての誤解

3 アルコール依存が引き起こす問題

第2章 セルフヘルプグループとしてのAA

1 自助努力の限界

2 「私」を支える「私たち」の重要性

第3章 AAはどのように描かれてきたか

1 AAの歴史の研究

2 国際比較

3 教育の場としてのAA

4 アルコール依存症という病気

5 「嗜癖」、「アダルト・チルドレン」

——依存症者を囲む人々の性格の病

6 アルコール依存症者の内面に注目する

7 現代社会論・社会運動として

8 メンバーの多様性に触れる

第4章 AAの成立と宗教性をめぐる葛藤

1 前史——オックスフォードグループ運動

2 ビルとボブの物語——宗教性をめぐる葛藤(一)

3 オックスフォードグループとの分離

——宗教性をめぐる葛藤(二)

4 テキストの成立——宗教性をめぐる葛藤(三)

5 「心理学が宗教の問題点を克服する」という期待

書評と紹介

- 6 禁酒と断酒の違い——宗教性をめぐる葛藤(四)
- 第5章 経験の方向づけ
 - 1 経験と文書を突き合わせる
 - 2 「十二のステップ」と仲間の経験
 - 3 「十二の伝統」と集団の特徴
- 第6章 語りとサポートの共同体
 - 1 「言いつばなし」と「聞きつばなし」の意味
 - 2 メンバーの悩み——ミーティングで語られる重荷
 - 3 ミーティングという語りの場
 - 4 ミーティング内の方向づけ
 - 5 ミーティング外の方向づけの意味
- 第7章 〈重要な他者〉によるサポートの意味
 - 1 〈重要な他者〉の機能取り込み
 - 2 三様の「そばにいること」
 - 3 体験に近い／体験から遠い
- 第8章 AAにおける「霊性」
 - 1 高められた父
 - 2 神表象はあるが、それを信じるか否か
 - 3 AAのハイヤー・パワー
 - 4 語りとサポートを超えて
 - 5 AAにおける「霊性」の内容とその意味
 - 6 断酒が作り出す共同性
- 第9章 AAの現在と未来
 - 1 日本における断酒会とAA
 - 2 他の依存症への反響

- 3 世界を救うか、自己愛か
 - 4 サポートの忘却・サポートの想起
- 参考文献

第1章では、アル中のサラリーマンがセルフヘルプグループに顔を出し、徐々に断酒生活へと踏み出していくというエピソードを導入にして、AAのミーティングの雰囲気を読者に伝えるとともに、アルコール依存症が、困難な問題を伴うれっきとした病気であるということが確認されている。アルコール依存は「不治の病」であり、「治癒はないが回復はある」。専門の病院もあるのだが、回復のためには、本人の自主的努力が不可欠であると指摘される。

第2章では、セルフヘルプグループとしてのAAの特徴が指摘される。専門家による治療と、家族・友人からの支援を得ながらも、同じく飲酒の問題に苦しむ当事者同士の支え合いがAAの中核をなす。断酒を続けることに失敗し、再飲酒した時に、それをあらかじめ想定済みのこととして受け入れ、徐々に償いができるようにする。このように「罪責感をマネジメント」しながら、「私 (self)」を「私たち (selfes)」が支えることがAAの特徴であるとされる。

第3章では、AAの研究史を概観しながら、本書の独自性がどこにあるのかが示されている。AAの持つ宗教性や、民間療法や禁酒運動の歴史の中での位置づけに注目した先行研究を引き継ぎながら、本書はオックスフォード・グループや禁酒運動、そして当時の心理学思想との関係を吟味するという点で、

特権的位置にあるという。著者は、ピーター・ホームズにならって、「心理学と宗教の交流史」という観点から、AAを近代宗教学における大衆的な一運動との例として捉える立場をとる。自身の日本での参与観察に基づいているというのも本書の特徴であるが、本書は「世界標準の断酒法」に焦点を合わせるという。また、著者は、AAのメンバーの多様性を見失わせる可能性があると、共依存、嗜癖、アダルト・チルドレンといった概念に依拠することに慎重な姿勢を示している。著者が評価するのは、アルコール依存症患者の内面と、共同体内部の「語り」を通じての相互作用に注目する研究動向である。その上で、本書が新たに光を当てるのは、AAにおいて、神に対する懷疑が広く存在している時代に、宗教性をめぐる葛藤がどう扱われているかという問題である。従来からあったアルコール依存症が自己愛的性格特徴を持つという仮説に対しては、本書はハイイツ・コフートの精神分析自己心理学を援用し、「自己愛からサポートへの展開」という点に着目するところが新しいという。「重要な他者」がそばにすることでメンバーがサポートされる状況」を描こうというのが著者の基本的観点である。

第4章は、歴史的文脈におけるAAの位置についての概説的知識を与えてくれるという点で、宗教学研究に関わる読者にとつては情報が豊富な部分である。AAが「十二のステップ」を掲げ、その中に「自分を超えた大きな力」「自分なりに理解した神」といった文言が含まれることによって、AAが宗教的であるというイメージが一般に広がっていると思われる。しかし、その文言が現行のようになったのは、AAが宗教色を脱色して

いった結果であるということが描かれる。AAはオックスフォードグループ運動の一環として発生したが、AAの創始者たちは、「最奥での自我の収縮」という回心観を提出したウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』や、アルコール依存を「霊的渴望」という観点で理解するC・G・ユングの思想を咀嚼しながら、「心理学と宗教との間」に救いの道を見出していたという。また、この章では、アルコールの社会からの根絶を目指す非妥協的な「禁酒」運動と、問題飲酒者の飲酒をなくそうとするAAの「断酒」との違いを確認しながら、AAの特徴を、一時的に飲酒の罪責観を棚上げしておき、それを徐々に償っていかうとする点に求めている。

第5章では、AAの会員の体験談を、AAの公式文書である「十二のステップ」と突き合わせる作業が行なわれる。AAが単なる「言いつばなし、聞きつばなし」のミーティングを行なっているのではなく、「十二のステップ」は、断酒の道を歩むアルコール依存症者が、アルコールへの無力を認め（ステップ一）、「自分なりに理解した神」に生き方をゆだねる決心をし（ステップ三）、霊的に目覚めた（ステップ十二）という体験の内省的独白というスタイルをとるが、これが、メンバーが体験を反省する基本的枠組と語彙を提供し、一定の方向づけを与えていることが検証される。同じく公式文書である「十二の伝統」の方は組織論である。個人の回復はAAの一体性にかかっている（伝統一）。外部の団体と利害関係を持つべきではない（伝統六）。外部からの寄付も辞退すべきである（伝統七）。また、外部の問題に意見を持つべきではない（伝統十）。無名で

書評と紹介

あることがAA全体の霊的基礎である（伝統十二）。このように、「十二の伝統」は、AAの一体性の維持という問題意識に貫かれており、統一見解を用意することで、個々のメンバーが断酒に安定して取り組めるように配慮がされている。

第6章では、語り、人の話しを聞くことで経験を分かち合う、ミーティングの実際が紹介される。ミーティングは、激しい感情の発露などを伴わず、淡々と進むことがほとんどだという。自己啓発セミナーとの比較で、厳しく自己責任を問うようなフィードバックが弱いという特徴が指摘される。著者自身による聴き取り調査の成果を用いながら、古参者が新参者の世話係をとめるというスポンサー制度が紹介されるが、この制度がAAを支える一つの骨格としてきわめて重要であることが伺われる。世話をされるだけでなく、することも、断酒を続けるために必要な支えとなっているのである。

第7章では、コフートの自己心理学の理論からAAによるサポートの理解が試みられる。ポイントには、AAでは、メンバー同士が自己の一部として体験される、〈重要な他者〉としてそばにいて支え合っているということである。AAの創始者の「おまえにはもう一人のアルコールが必要なんだ。その人がおまえを必要としているのと同じように、おまえもその人が必要なんだ！」という言葉が引かれているが、まさにここに、「自己対象」の体験が語られているとされる。自己を映し出す鏡であり、理想化の対象であり、また自己の分身でもある自己対象の体験を「反復再生産する仕組み」がAAであると指摘されている。

第8章では、やはりAAが宗教的であると見做されるひとつの理由である「ハイヤー・パワー」の概念を中心に、AAの「霊性」が検討される。この章では、著者自身の聞き取り調査より、日本人の口からハイヤー・パワーが語られている言葉が紹介されている。ハイヤー・パワーは特定宗教の神ではなく、「自分なりに理解した神」であり、様々なイメージがその中に代入され得る。AAは個人同士の支え合いの場でありつつ、ハイヤー・パワーについて語られる時にはメンバーの個性は背後に退く。また、複数のメンバーの属性が一人に重ね合わされたようなものとして〈重要な他者〉が語られるという指摘がある。著者は、AAの体験談の形式は「宗教ではないけれども魂の内奥に触れる」と表現して、AAを宗教ではなく霊性と結び付ける。「不完全さを受け入れるスピリチュアリティ」が、禁酒運動との比較において際立つというのが重要な指摘である。

最後の第9章では、AAの現状と問題点が概観される。AAは全世界で二百万人規模にまで拡大し、アルコール依存症以外の依存症のセルフヘルプグループにも「十二のステップ」が取り入れられるといった広がりも見せている。しかし、AAが自分探しの道具にされてしまったり、メンバーが「インナー・チャイルド」に夢中になり、他人のサポートをないがしろにするといった問題があるという。最後に、飲酒運転厳罰法の法改正によせて、AAが啓蒙活動や治療に協力できるのではないかとという実践的提言がなされ、本書の締めくくりとされている。

次に、評者なりに本書についてのコメントを記したい。ま

ず、本書は研究の焦点を「宗教」から「霊性（スピリチュアリティ）」「癒し」も含む「宗教性」へと拡大させる近年の研究動向を反映したものであり、AAの全体像の提示、日本の事例の紹介という点で、先駆的な業績である。

方法的特徴としては、第一に、著者自身が二百人以上のAAのメンバーへの聴き取り調査を行ない、その結果を活用しているということ、第二に、AAを近代宗教思想史、心理学思想史の文脈上に位置づける思想的アプローチを採用していること、第三に、心理学（精神分析）の理論に依拠した考察を試みていることが指摘できる。この第三の点に関しては、博士論文の内容を今回の出版にあわせて取捨選択する際に大きく削られたというが、その妥当性について評価の分かれるところであろう。

本書の意義としては、第一に、成立の歴史的経緯を含めて、AAの全体像をバランスよく提示しながら、その宗教的（霊的）側面を明らかにしたということがある。とりわけ、現代のセラピー文化における類似の諸現象との比較の観点から、自己責任の論理を徹底して対人的スキルを磨く自己啓発セミナーや、道徳的完全主義に立つ禁酒運動のメンタリティとの相違を指摘し、AAの特徴を浮かび上がらせている点は説得力がある。すなわち、AAに関してミーティング活動がクロージアツプされがちだが、AAのミーティングはカタルシスや回心を引き起こすような活動のクライマックスではなく、むしろ日常的なスポンサーシップなどにおける「心理的にそばにいることを重視する共同性」（一八一頁）にこそ、AAの本質が求められ

る、というのが本書の眼目であろう。

第二に、そのようなAAの特徴が、「宗教性との葛藤」の中で育まれてきたものであり、AAが宗教的ではあるが宗教ではないという両義的な側面をとらえていることが重要である。

「自分なりに理解した神」「ハイヤー・パワー」といった概念の分析とともに、体験談という形式や、スポンサーシップの方の分析によって、「重要な他者」「共同性」等をキーワードにして、宗教とは異なる、スピリチュアリティという観点からAAの特徴が描き出されている。

第三に、地道な調査を基礎として、外来の運動であるAAが日本に根付いている様相を、当事者たちの言葉によって裏付けた点を挙げておきたい。プライバシーの問題や、AAの匿名の原則といった制約から、本書ではAAの刊行物からの引用を多く利用しているとはいえず、随所に日本人メンバーの肉声が再現されていることは本書の説得力を増している。

次に、本書における問題点、ないしは、なお課題とすると思われる点について述べてみたい。まず、コフートの自己心理学理論を用いた分析の妥当性についてである。乳児にとつての養育者のような、「自己の一部として体験されるほどそばにいるが自己の一部ではない（重要な他者）」である「自己対象」と、心の中で関わりながら安定した自己が築かれていくというのが、コフートの理論である（一四六頁）。自己対象には、自己を映し、理想化され、分身となるという機能がある。そして、著者は、AAは創始者たちの「自己対象体験」によって成立したものであり、AAが機能しているのはメンバーがお互いにと

書評と紹介

って「自己対象」となっているからであると論じる。これはなるほどと思わせる説明ではあるが、精神分析の専門家でない者としては、乳児の心理発達をモデルにしているらしいコフートの理論枠組みと、AAのメンバーの内面に生じていることが、どういうレヴェルで一致するのか判断のつきかねるところである。本書でのコフート理論の位置づけは、分析的説明というよりは、類比的に理解を深めるものと考えるべきであろうか。言い換えれば、コフートの語彙によらずとも、自らと同じ失敗を重ねながら生きていく先達とともに、支え、支えられながら断酒を続けていくことによって、利己性と利他性が両立しているというAAのサポートのあり方は、著者の言葉によって十分な説得力とともに丹念に説明し得ると思われる。

とはいえ、多様なものが代入されるというハイヤー・パワーの性質を考えるときには、精神分析的な「対象」の概念が有効であったろうし、AAにおけるサポートされることとサポートすることの関係を理解するために、「自己対象転移」の諸様式が重要な手がかりとなったことは確かである。

とりわけ、著者には、AAを通してセルフヘルプグループのネガティブなイメージを超える部分を描き出したいという意図があったと思われるが、コフートを援用することによって著者の洞察が深まったことも事実であろう。すなわち、セルフ・ヘルプの「セルフ」には「自己責任」「利己主義」「自己愛」といった連想を超える、複数のセルフ (selves) による共同性の構築という含みもあり、それが利他主義へと転化していくありようは、他者を自己のように体験するというコフートの発想によ

って理解を深められたことであろう。そう考えれば、コフート理論への取り組みはよい果実を結んだと評価すべきだろうか。

次に、本書では日米両国におけるAAのあり方の相違には焦点を当てておらず、引用される体験談についても、それが欧米人のものなのか、日本人のものなのかわかりにくい。これは、匿名を謳う団体ならではの特徴を反映しているのかも知れないが、著者が「世界標準の断酒法」に焦点を合わせるといふ戦略を採っているためであろう。まえがきにインタビューの日米比較を断念したと書かれているが、AAの成立の背景と文脈についても、米国の宗教思想史の文脈と、日本での受容のそれとは当然異なっているはずである。ハイヤー・パワーには多様なものが代入され得る(一七五頁)とされ、特定の神学的含意から自由であるという普遍性が指摘されているが、では何が代入されるのか、既存の信仰との関係はどうなのかという問いに、日米比較の観点から取り組むこともできたであろう。もつとも、この問いは、スピリチュアリティ自体の文化間比較という問題へと拡散するであろうし、本格的に取り組むには紙数の制約もあったことだろう。

結局のところ、本書は、一般向けの啓蒙書の体裁で出版されているおかげでAAの全体像を描くことに成功し、魅力的なものとなっているが、逆に、掘り下げた分析や詳細な資料の提示を期待する向きにはそれが物足りないところである。本書の刊行に当たって泣く泣く削った部分も少なからずあったと推察される。しかし幸いにして、とりわけ同じ業界の研究者には、今後も、著者による論文や発表に触れる機会が豊富に用意されて

いる。本書から得られた洞察を有機的に発展させて、米国や日本の禁酒運動や類似団体との比較をはじめとして、多くのひきだしを持つ著者は、我々の期待に添えてくれるにちがいない。このささやかな要望をもって、拙い書評の結びとしたい。

青木 健著

『ゾロアスター教の興亡』

——サーサーン朝ペルシアからムガル帝国へ——

刀水書房 二〇〇七年一月一〇日刊

A5判 XX十三七七頁 八五〇〇円＋税

榊 和良

七千年の歴史を誇るイランの精神文化の遺産の一つは、古代イラン諸宗教の中から改革宗教として生まれたゾロアスター教である。ユダヤ・キリスト教を始めとする諸宗教や哲学思想にも大きな影響を与えた古代宗教であることはよく知られている。一方、シルクロードを介して祆教として正倉院や東大寺にもその跡を残し、インドのパールスイー商人の来日などを通しての交流を考えると、我々にとってもそれほど縁遠い存在ではない。しかるにその教祖の活躍年代にも未だ定説が得られず、さまざまな要素を取り入れて変貌したその宗教史の全体像を描き出すこともきわめて困難だといわれる宗教なのである。

本書は、ゾロアスター教の研究書ではあるが、通史的で網羅的な解説書ではない。ゾロアスター教思想史の中でも、ゾロアスター教の教義が神話的な天使論・悪魔論の集合体からより理論化・組織化された方向へと推移していく過程に注目して、「サーサーン王朝時代に理論的な展開を示したゾロアスター教思想」と「ムガル帝国時代にイスラーム神秘主義の影響下に形